

事業企画コース I

地域において新しいダンスプログラムを

どのように定着させていくことが出来るのか

アドバイザー講評

研修プログラム

参加者名簿

研修報告

はじめに

- 第一章 コンテンポラリーダンス事業継続の方法を探る
 - 1-1 マスターコースでめざすもの
 - 1-2 現状と課題が導いた"コミュニティダンス"の概念
 - 1-3 Dance Life Project 企画誕生

〈資料〉

- (1) イギリスにおけるコミュニティダンスについて
- (2) 日本の地方都市で実施されているコンテンポラリーダンス 事業【地域創造・公共ホール現代ダンス活性化事業より】
- 第二章 Dance Life Project 企画立案のアイデアを探る〈研修報告〉
 - 2-1 前期研修 in 福岡
 - 2-2 後期研修 in 多治見
- 第三章 Dance Life Project 企画書

~日本におけるコミュニティダンスの試み~

- 3-1 Dance Life Project の理念
- 3-2 ダンスと社会を結ぶ
- 3-3 Dance Life Project 実施計画
- 3-4 各地域のコミュニティダンス企画案
 - ■連携先と実施分野
 - ■各地域の企画案
- 3-5 Dance Life Project 思い描く将来像

事業企画コース I アドバイザー講評

NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)代表 佐東 範一

入稿一歩手前の報告書を読んで、よくぞこの短期間にここまで完成したなと、感慨深いものがあります。今回このマスターコースの私の呼びかけである「**地域において新しいダンスプログラムをどのように定着させていくことが出来るのか**」というテーマに対して、札幌から福岡までの7人の猛者が集まってくれました。

まさかこの最初のテーマからコミュニティダンスに行き着くとは、私自身まったく考えていませんでした。3年前にイギリスに視察に行き、コミュニティダンスの状況などに触れとても感銘を受け、日本でいかにこのコミュニティダンスという概念と活動を広げていけるかと、それ以来考え続けてきました。そのことと今回のマスターコースのテーマが、具体的に結びつくとは全く想定しないで、今一番の全国の課題だと思ってテーマ設定をしたのですが、まさかまさか。しかし考えてみたら必然だと思いました。

第一回目の東京での会議を皮切りに、福岡、多治見での調査視察を経て、再度東京での最終会議+プレゼンという全員で顔を合わしたのは、たった 4 回なのですが、毎回泊まりがけで会議の延長としての恒例の飲み会もあり、そして 200 通以上のメールのやりとりの中で、地域創造ダンスマスターコースという"研修プログラム"から、"未来に向けて芸術文化を日本の社会の中でどうしていくべきなのか"という、最も身近であり壮大なテーマを抱える"プロジェクトチーム"に変身していったように思います。とても優秀かつ意欲のあるチームメンバーがそろいました。

そして最終的に行き着いた「ダンスライフプロジェクト-Dance Life Project-」。 全国同時多発的プロジェクト、あらゆる世代・あらゆる分野に通じるダンスのプロジェクト。

あとは具体的に実行し、初めは7ヶ所からかもしれませんが、今後全国各地で行われることによって、日本の文化芸術のあり方を変える起爆剤となることを祈っています。

前置きはこの辺にして、どうぞ皆様最後までじっくりと読み進みください。アドバイザーとしてこれ 以上語ることはありません。お読みになって自分の地域でも是非一緒にやりたいと手を挙げる気に なったらご連絡ください。

さあ、みんな準備をして始めましょう!!

2007年3月21日

参考1:募集要項文章 by佐東

近年急激に広がってきているコンテンポラリーダンス。その広がりの要因として、コンテンポラリーダンスが世代を超えて、誰もがダンスという身体表現を行う側になれること、各地域から世界に通じるアーティストを育てる可能性があること、芸術の分野だけではなくて、教育・福祉・健康など様々な分野と連携してプログラムを組めること、などが挙げられます。地域創造のダンス活性化事業も始まり、各地で様々な試みが起きています。

今回このマスターコースでは、"この新たに始まったダンスのムーブメントを一過性のものに終わらせないために、各地域においていかに継続させていくことが出来るのか"という点を集中的に参加者の皆様と考え、検討したいと思います。

サブテーマ:

「子供から年配の方まで、コンテンポラリーダンスに触れる機会をいかに継続的に作るか」 「他分野との連携のシステムをどう創り、継続させていくのか」 「常に地元のダンスアーティストを育て、支えていくシステムをどう作ればよいのか」

参考2: 始まる前の佐東から参加者への手紙の抜粋

「・・・・・・・・・・今回のマスターコースで私が狙っているところを説明させていただきます。

皆さんの応募のレポートを拝見して、これから必要だと思っているところ=何らかの壁を乗り越えないといけないところ、が共通していると思いました。それはコンテンポラリーダンスが多くの可能性を持っているけれど、まだまだアーティストも観客も少ないし、活動の場所も少ない、かつまだまだ日常生活の中にコンテンポラリーダンスが存在していない、ということだと思います。しかし、考えるとそれはコンテンポラリーダンスだけの問題ではなくて、日本の文化芸術の状況とそれほど変わらない、ということなのだと思います。つまりコンテンポラリーダンスの現在の課題を解決しようとすることは、日本の文化芸術のあり方を変革していくことと同じなのでしょう。

今回皆様と頭をつき合わせて"発明"したいことは、"コンテンポラリーダンスの持っている可能性 =力を日常の生活の中で、継続的に生かすためのシステム=仕組み"です。

具体的にどのようなシステムを目指したいかを書きます。これまでたとえばダンスのプログラムを学校など自分のホール以外とのころで行おうとすると、ほかのところに"協力を要請する"必要がありました。形としては、こちらから話を持ちかけ、協力してもらう。こちらが主体として先方が依頼される立場でした。仕掛ける側が決まっている限りは、この関係性は変わらず、仕掛ける側が常に中心に存在しているということです。今回考えたいシステムは、この中心点をずらすことができないだろうかというところです。たとえば、ホール側も必要だと思い、学校やほか分野の人たちも必要だと思うことをメインテーマに据え、こちらから仕掛ける必要はあるけれど、立場的には参加団体のすべてがイーブンな立場でかかわれるようなシステム・・・行う目的が中心に来るようなネットワークのようなものを作れないだろうか。そのシステムの意味するところは、たとえ担当者が変わったとしてもその組織として参加していれば、継続的に引き継がれていくものになるようなものとして考えています。数年後に振り返ったときに、なんで数年前までこんなことができなかったのだろうかと思えるような、社会の中で当たり前に必要で、一緒に行うのがとても自然なものを目指したいです。・・・・・・」

事業企画コース I 研修プログラム

(1) 前期研修会 7月20日(木)~21日(金)

日程		内容	会場
7/20	ぜミ①	佐東コース説明/参加者プレゼンテーション	地域創造会議室
	ぜミ②	参加者プレゼンテーション	
7/21	ぜミ③	システム創りの為のディスカッション	地域創造会議室
	ぜミ④	基本システム構想をまとめる	

(2) 調査・企画会議

日程		内容	視察先	
会議①	10/7~10/8	踊りに行くぜ!!福岡公演視察のほか、福岡のダンス	福岡市文化芸術	
		を支えて来た地元のダンス関係者、福祉関係者、民間	振興財団ほか	
		事業者等へのヒアリング		
会議②	12/12~12/13	市民が市民を教える生涯学習システム「多治見オープ	多治見市文化振	
		ンキャンパス」について調査するなかで、福祉や教育関	興事業団ほか	
		係者、主婦、高齢者など様々な分野の人が、コンテンポ		
		ラリーダンスの持つ力をそれぞれの日常の中で継続的		
		に生かすシステム構築のヒントを探る。		

(3) 後期研修会 平成19年1月31日(水)~2月1日(木)

時間		内容	会場
1/31	13:30~	発表案作成	地域創造会議室
2/1	10:00~16:00	発表案作成(10:00~12:30)	
		成果発表会(13:30~15:30)	

(4) 報告書作成 平成19年2月~3月

事業企画コース I 参加者名簿

	1
1 北海道 大野 典子 財団法人札幌市芸術文化財団	札幌市教育文化会館
	会館設立 1977 年
〒060-0001 北海道札幌市中央区北1条西13丁目	ホール 1 キャパ 1,100
TEL011-271-5822 / FAX011-271-1916	ホール2 キャパ 360
自治体人口 約1,890,000人	自主事業 ③ /事業予算 ④

2 神奈川県 高松 有希子 財団法人横浜市芸術文化振興財団	(財)横浜市芸術文化振興財団
	業務管理グループ
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい 3-4-1 横浜美術館8F	_
TEL045-221-0212 / FAX045-221-0216	_
自治体人口 約 3,600,000 人	自主事業 -/事業予算 -

3 岐阜県 加藤 愛 財団法人多治見市文化振興事業団	多治見市文化会館
	会館設立 1981 年
〒507-0039 岐阜県多治見市十九田町2-8	ホール 1 キャパ 1314
TEL0572-23-2600 / FAX0572-23-7555	ホール2 キャパ 402
自治体人口 約 110,000 人	自主事業 ④ /事業予算 ⑤

4 岐阜県 服部 裕司 山県市教育委員会	文化の里 花咲きホール
	会館設立 2005 年
〒501-2121 岐阜県山県市大門 922-4	ホール 1 キャパ 350
TEL0729-24-5112 / FAX0729-24-5010	
自治体人口 約 31,000 人	自主事業 ③ /事業予算 ③

5 富山県 宮原 麻子 財団法人富山市民文化事業団	富山市芸術文化ホール
	会館設立 1996 年
〒 930-0858 富山県富山市牛島町9-28	ホール 1 キャパ 2200
TEL 076-445-5610 / FAX 076-445-5611	
自治体人口 約 418,000 人	自主事業 ④ /事業予算 ⑥

自主事業本数/①0本 ②1~10本 ③11~20本 ④21本以上

自主事業予算/①0 円 ②1000万円未満 ③ \sim 3000万円未満 ④ \sim 5000万円未満 ⑤1億円未満 ⑥1億円以上

6 香川県 大森 誠一 財団法人高松市文化芸術財団	サンポートホール高松
	会館設立 2004 年
〒 760-0019 香川県高松市サンポート2-1	ホール 1 キャパ 1500
TEL 087-825-5010 / FAX 087-825-5040	ホール2 キャパ 300
自治体人口 約 427,000 人	自主事業- /事業予算 ④

7 福岡県 吉村 美紀 財団法人福岡市文化芸術振興財団	_
〒 812-0027 福岡市博多区下川端町 3-1	_
リバレインセンタービル9F	_
TEL 092-263-6265 / FAX 092-263-6259	
自治体人口 約 1,418,000人	自主事業 ④/事業予算 ⑤

自主事業本数/①0本 ②1~10本 ③11~20本 ④21本以上

自主事業予算/①0円 ②1000万円未満 ③~3000万円未満 ④~5000万円未満 ⑤1億円未満 ⑥1億円以上

はじめに

『近年急激に広がってきているコンテンポラリーダンスを一過性のものに終わらせず、各地域でいかに継続させていくことが出来るのか』というテーマのもと、全国7箇所(北海道:札幌市、神奈川県:横浜市、富山県:富山市、岐阜県:多治見市・山県市、香川県:高松市、福岡県:福岡市)から参加した各ホール(団体)では、それぞれコンテンポラリーダンス事業に関する悩みや問題を抱えていた。これまで実施したダンス事業の経験の違いは様々であったが、今後もコンテンポラリーダンスを事業として継続するために乗り越えなくてはならない課題に共通点があった。本コースでは、これを「継続のためのシステムづくり(=仕組み)」とし、このシステムを考案し、企画書を作成し本コースの報告書として提案することとなった。

報告書の概要

第1章では、まず「継続のためのシステムづくり」としてマスターコースのテーマと目指す目的について述べ、前出のテーマのもとで行われた2回の打ち合わせ議事録により、継続の方法として「コミュニティダンス」と「Dance Life Project」のキーワードに辿り着くまでの過程を紹介する。

第1回目の打ち合わせでは多様なコンテンポラリーダンスの持つ可能性を列挙するとともに継続が困難である現状について討論し、現代の日本が抱えている問題点を踏まえたうえで、継続のために必要な課題を考察し、解決の糸口としてイギリスで行なわれている「コミュニティダンス」のキーワードに辿り着き、事業の提携先を列挙するまでを討論した。

第2回目の打ち合わせでは各地域で他分野と連携する際の問題点と課題を提起し、解決案について考察した結果、新しいシステムとして「Dance Life Project」を考案、企画書作成のための実施スケジュールや取り上げるべき分野について検討した。

第1章の終わりに資料としてイギリスのコミュニティダンスについて、また日本の地方都市で 実施されているコンテンポラリーダンスの事例やその効果に関する資料を添付した。

第2章では、福岡県福岡市と岐阜県多治見市への研修報告により「Dance Life Project」と 名付けたシステム作りのためにこの2地域の事業展開の方法と現状が大きなヒントとアイデアと なった理由について紹介する。

福岡では「波に乗れ!ダンス波~」「踊りに行くぜ!! 福岡公演」の視察とともに同事業の開催に関わる(株)イムズの山本氏、福祉作業所「工房まる」樋口氏、福岡アジア美術館中尾氏などへのインタビューを行った。 異分野の人との連携の方法、両者にとってのメリットが存在すること、連携することで広がる可能性などについて確認した。 続く多治見では、市民による市民のための文化活動システム「たじみオープンキャンパス」を視察。 ここでは、ダンス事業の継

続のポイントとして我々がイメージしていた「"仕掛ける側が常に中心に存在している"中心点をずらし、目的が中心に来るネットワークをつくる」という点が見事にシステム化されていた。学ぶ側も教える側も市民であり、企画は市民が考え、経営は黒字、ひとつひとつの講座に財団職員の手は殆どかからない、など従来の事業開催に伴う固定観念を覆す「たじみオープンキャンパス」は、大きなヒントと手ごたえを得る場であった。

第3章は、「Dance Life Project」企画書である。コミュニティダンスを行う可能性のあるさまざまな分野から健康・福祉・教育・まちづくり・まちおこし4分野を抽出し、それぞれの概要説明とともに参加7団体による各地域での具体案を記載する。

継続することが目的である「Dance Life Project」は単年度でなく3年間を予定し、平成19年度は調査と企画立案の期間とし、各地域でのプログラムの開始時期については平成19年

に先駆けて開始する1団体を除き平成20 年度からスタートする。このため企画書は 現段階では具体性に欠けるものもあるが、 この企画書を元に各団体での情報交換を 含めさらに綿密な練り直しを行い、地域に 合う形で実現することを目指して行く。よっ て本報告書は「Dance Life Project」が始 動する第一歩としての役割も担っている。



第一章 コンテンポラリーダンス継続の方法を探る

1-1 マスターコースでめざすもの

■ テーマ

事業企画コース I では、『近年急激に広がってきているコンテンポラリーダンスを一過性の ものに終わらせず、各地域でいかに継続させていくことが出来るのか』というテーマのもと、全 国7箇所の地域からコンテンポラリーダンス事業を既に実施している、若しくは今後事業に取り 入れたいと考えている公共ホール担当者が集った。

- ・ 世代を超えて誰もが身体表現として行なう側になれる
- ・ 各地域からアーティストを育てる可能性がある
- 芸術分野のみならず教育・福祉・健康などさまざまな分野との連携ができる

幅広い可能性を秘めるコンテンポラリーダンスであるが、事業の継続には大きなエネルギーと長期的展望が必要である。各地域の現状や抱えている問題点を踏まえ、アドバイザー佐東範一氏が参加者に投げかけたのは、マスターコースで取り組む「継続のための具体的な方法」についてのイメージであった。

■ 継続のための具体的な方法「仕掛ける側から目的へ中心点をずらす」

参加7団体がそれぞれ、コンテンポラリーダンス事業の継続に伴う問題点を解決するためにこれから必要だと思っているところ(=何らかの壁を乗り越えないといけないところ)は共通していた。それはコンテンポラリーダンスが多くの可能性を持っているが、まだアーティストも観客も少なく活動の場所も少ない、かつまだ日常生活の中にコンテンポラリーダンスが存在していない、ということであった。この問題解決のため、佐東氏は、"コンテンポラリーダンスの持っている"力"を日常生活の中で、継続的に生かすためのシステム=仕組み"の"発明"を、マスターコースの目的とすることを提案した。

「現状では、ホール側が学校など別の場所でダンスプログラムを行なうときに"協力を要請する"必要があり、ホール側が主体となって先方に依頼し協力してもらうという関係性が常に変わらず、中心点が仕掛ける側に存在している。この中心点を仕掛ける側から、ホールだけでなく学校、他の分野の人にとっても必要な目的へとずらし、ホール側が仕掛けたとしても参加団



体すべてが対等な立場で関わり行なう目的を中心としたネットワークのようなものができれば、たとえ担当者が変わってもその組織として参加していれば継続的に引き継がれシステム化されるであろう。数年後に振り返ったときに、なんで数年前までこんなことができなかったのだろうかと思えるような社会の中で、当たり前に必要で一緒に行なうの

がとても自然なものを目指したい。各地域で起こっていることはコンテンポラリーダンスだけの問題ではなく、日本の文化芸術の状況とそれほど変わらないのではないか。つまりコンテンポラリーダンスの現在の課題を解決しようとすることは、日本の文化芸術のあり方を変革していくことと同じなのだ。」

佐東氏の言葉は、我々に大きな責任感と将来の日本の芸術文化ならびに社会が直面する であろう諸問題に対する危機感とを与えた。このことは、芸術活動が持つさまざまな可能性の 中で従来我々が関わってきた「優れた作品の創造」とは異なる部分について検討する必要性 をもたらした。

1-2現状と課題が導いた"コミュニティダンス"の概念

-第1回 打ち合わせ より(2006.7.20/21)

テーマ「地域において新しいダンスプログラムをどのように定着させていくことができるのか」 を考える前提として、まずコンテンポラリーダンスの持つ可能性を検証し、そういった可能性を 持っているにもかかわらずなぜ継続が難しいのかを検討した。

コンテンポラリーダンスの持つ可能性

他の芸術分野に比べ、「決まりごとや規制が少ない」こと。さらに、そこから派生する可能性として、下記のことが考えられる。

- *「身体が楽器になる」
 - ・人間が持つ身体を楽器のように使って、それぞれの表現を行うことができる。
 - ・年齢や障がいの有無に関わらず誰でも参加することができる。
 - ・身体を通して自己の内面や他者との関係を考えることができる。
- *「セリフがない」
 - ・言葉に頼らないので、国籍や言葉、セリフへの理解度に制限されずにコミュニケーションできるツールとなるし、多様な層に対してアピールが可能。
- *「厳密な型にとらわれない」
- ・舞踊の他ジャンルと異なり、誰もがダンスを創ることができる。
- ・創作を通して、自分が他人から認められる場を提供することができる。

これだけの可能性があるのに、なぜコンテンポラリーダンスプログラムの継続が難しいのか?

継続が難しい現状

継続するための 仕組みがない ダンスに継続的に触れる環境がない(わかりにくい、特別なものといった印象を持つ人が多く、観客も少ない)

コンテンポラリーダン スにおけるアーティス トやカリスマが少ない

継続のための課題

仕組みづくり(他分野との 連携の仕組みをどう創り 継続させるか、地元ファシ リテーターの育成)

子供から年配まで、 ダンスに触れる機会をい かに継続できるか 地元のアーティストの 育成をいかに 継続できるか

"コミュニティダンス"という仕組み

■"コミュニティダンス"の概念

コンテンポラリーダンスの持つ可能性を媒体にした、社会とダンスの新しい関わり方=「コミュティダンス」。身体を表現の手段としたダンスというカテゴリーが地域の他分野と連携することで社会と繋がり、ダンス文化自体が社会的価値を持つことになる。そのことにより、ダンス文化の普及、継続性も図られる。

■連携が想定できる分野

各地の文化財団、公共ホール、文化施設、学校、大学、教育機関、福祉施設(障がい者施設、高齢者施設など)、医療施設、行政、企業メセナ、街づくり、国、健康、商店街、町内会、ダンスサークル、地元の文化団体、環境保護、国際交流協会、農協・漁協(村おこしに繋がる)。

なお、主たる連携先として考えられるのが各地の文化財団・公共ホール・文化施設を管理 する地方自治体であるが、役所では定期的に人事異動があるため担当者がすぐに変わって しまい連携が続いていかないという状況がある。しかし、文化団体等に派遣され、関連が深か った部署にいた地方自治体の職員が、異動した先でも活用できるようなダンスのプログラムが 存在すれば、これまで弊害であった人事異動が、逆にダンスプログラムが広がるきっかけにな ると考えられる。

1-3 Dance Life Project 企画誕生 - 第2回 打ち合わせより(2006.12.13)

前回の打ち合わせで、ダンスプログラムを継続していくためのしくみとして「コミュニティダンス」という概念に行き着いた。2回目の打ち合わせでは、この概念に具体性をもたせるための検討を行った。

コンテンポラリーダンスは、既にその価値が認められている地域では舞台公演やワークショップがある程度開催されている。しかし演じる側、観る側も固定化しており、社会に広がっていかないという閉塞感が感じられる。

その現状を解消するためには、コンテンポラリーダンス文化自体が社会的価値を持つことで、その普及、継続性をめざす「コミュニティダンス」という発想こそふさわしいものである。

「コミュニティダンス」とは、これまでホールの中にいたコンテンポラリーダンスが、地域のコミュニティに出て行き積極的に地域の他団体と連携することで、ダンスを媒体にして社会の中のコミュニケーションを確立していく手段である。実際にイギリスでは社会問題解決のツールとしてダンスが使われている。そして連携を継続して行っていくことで、ダンスが社会的価値を持つことを一般の人に広く認識してもらうようになることを目指す。 究極的には、コミュニティダンスを通して、社会がコンテンポラリーダンスに継続的に触れるようになり、ダンスを理解する人

が増え、将来的にコンテンポラリーダンスのファン層が拡大することが目標である。

では、社会のどの分野と連携をしていくのか。このことは第1回打ち合わせでも検討したが、 連携が想定される分野は限りなく広がる。ここでは、「コミュニティダンス」のプログラムがより実 現および継続しやすい分野を、下記4つの観点から選び出すことにした。

- ① 実施することでPR効果が高い分野
- ② コミュニケーション確立の効果がみえやすい分野
- ③ 現代社会のニーズが高い分野
- ④ 連携する分野の人からの評価が比較的得やすい分野

以上の観点から、「健康」「福祉」「教育」「まちづくり・まちおこし」の 4 分野を選び、企画を立案することとした。これらの事業を全国で同時多発的に行うことで、これまでは点であった取り組みが、線となり、そして面となり、「コミュニティダンス」としての大きなムーブメントとなることをめざす。この全国区でのプロジェクトを「Dance Life Project」と命名した。

〈資料〉

(1) イギリスにおけるコミュニティダンスについて

■イギリスのコミュニティダンスの歴史

イギリスのコミュニティダンスは戦後、"誰にでも踊れるダンス"としてドイツからラバンが持ち帰り"すべての人にユニークなムーブメントがある。一緒にダンスをすることで失ったコミュニティの気持ち(連帯感)を取り戻せる"というダンスの民主化とコミュニティにとっての重要性を説いたことから始まり、学校教育やスラム化したコミュニティの再結束のため提供され、受け入れられていった。

1976年頃からはカウンターカルチャーの影響を受け、美術館やギャラリーを出てストリートなどで一般の人々にアートに触れてもらおうとするアートシーンの考え方がダンスにも広がり、活動の場をコミュニティに見出したことから、全国で盛んになり始める。

その後、アーツカウンシル¹が学校教育を離れた一般のダンス教育のためのサポートを開始するとともに、民間の慈善団体でもファンデーションシステムが立ち上がり始め、地方のコミュ

英国では、文化行政において芸術の自由と独立を保つための「アームレングスの原則」(芸術が行政と一定の距離を保ち、援助を受けながらしかも表現の自由と独立性を維持する)と呼ばれる施策をとっている。文化を所管する国の省庁は文化・メディア・スポーツ省であり、国は美術、劇場、コンサートホールといった芸術団体やアーティストの活動等に資金援助を行っているが、アーツカウンシルという専門集団による公的機関を通じて助成が実施され、行政機関と政府の間に一定の距離がおかれている。イングランド、スコットランド、ウエールズ、北アイルランドの4つの地域に個別にアーツカウンシルがおかれ、政府の予算と宝くじ基金、その他の予算により運営されている。

¹ Arts Council, England アーツカウンシル イングランド

ニティダンスに興味を持つエージェンシーが国の機関とともに地域のためのダンスに資金を出 し合うというシステムが生まれる。

後のThe Foundation for Community Dance²の前身の組織もこの頃から活動を始める。89年、アーツカウンシルに恒常的なダンスの実行機関の拠点としてナショナルダンスエージェンシーが設立され、コミュニティダンス企画がより各地に浸透していくことになった。

イギリスでコミュニティダンスが受け入れられた背景には「教育の意識変化(子供の教育の重視、機会均等)」「コミュニティの崩壊」「コミュニティ・プログラムに対するアーツ・ファンデーションからの資金援助」「仕事を求めるダンサーの存在」があったと考えられている。

■イギリスのコミュニティダンスの現状

2000年には毎週75,000件、毎週480万人もの人々が参加しており、対象者としては全体の半数が子供と若者であるが、特定の年齢や文化的背景、能力を持った者に焦点をあてたものや全ての若者を対象にしたものなどさまざまな形で行なわれている。実施期間も定期的・継続的なもの、プロジェクト的なものまで多様である。開催の方法はプロのアーティスト、カンパニー、オーガニゼーションと、地方自治体、ユースセンター、自治体の人々、教育関連の人々との連携による。

コミュニティダンスで出会った若者がダンスグループを立ち上げるケースも近年多く、1996年には全土で推定550以上のダンスグループがあった。ジャンルはアフリカンダンス、カリビアンダンス、南アジアのダンス、ストリートダンスなど幅が広く、障がいを持つ若者、持たない若者がともにワークすることに特化した活動を行なう例もある。

学校教育においては2002年、文化・メディア・スポーツ省と英国教育技能省からの予算で "子供たちの学校での学びをより楽しく創造的なものにすること"を目的にクリエイティブパート ナーシップ(Creative Partnerships)が設立され、アーツカウンシルが主導するプログラムの中 にはダンスも含まれ、子供に身体的効果とともに創造力の育成という精神的効果をあげている。 近年、イギリスでは、近代の工業産業化の時流の中で知識が偏重されてきたことによる様々な 問題が浮上しており、この解決策として国家が「創造力」の重要性を認め、これを育むダンスや アートの教育的活動が積極的に展開されている。

また、発展を続けるイギリスのコミュニティダンスの周辺には、コミュニティダンスに特化したさまざまな機構の存在がある。専門の独立行政法人が様々なプログラムやイベントを実施するほ

コミュニティダンスのための独立行政法人。さまざまなレベルの観点からコミュニティダンスを普及させるための興味関心を高める工夫、実際の活動の推進により円滑なダンスと地域社会の協調関係の構築をめざす。全国・各地域での企画のリーダー的存在としてプログラムを実施するほかイベント・会議・セミナー・アドバイスサービス・定期誌を発行し、最新情報を提供、ダンスやアーツの課題についての討論や対話の場も設けている

² The Foundation for Community Dance

か、専門的情報を発信する定期誌やインターネットのWEBサイト、コミュニティダンス専門アーティストのオンラインリストなど情報流通に関する活動が活発に行われ、コミュニティダンスを支えている。

■ダンスが持つ力と可能性(『Dance Teaching Essentials – published by Dance UK』より抜粋)

1)身体的な健康と適応力

全身の機能の向上、身体的な強度、スタミナ、柔軟性、瞬発力の向上/身体的な安定 感を身につけ、コントロールする力を得る/身体がどのように動いているかを理解し、健 康な状態と適応力を維持するために、適切な生活習慣を心がけるようになる、など

2) 文化的な側面へのアプローチ

文化の多様性を発見する入口となる/異文化に対する接し方を学ぶ、など

3)アーティスティックで美学的な理解と鑑賞力

自分の考えを自分なりの方法で形にして表現し、他者とコミュニケーションを図る方法を身につける/創造性を学び、創造的な思考方法や行動が取れるようになる/運動学的な知識を習得し、身体に関する知識を深められる/核心となるような基礎的で美学的な訓練の重要性を学ぶ、など

4) 自分自身、社会への理解と対応力

様々な感情や価値観、考え方を表現する方法にどのような形があるのか、よく考えるきっかけとなる/他者とのコミュニケーションを実践する機会となる/他者との共同作業を実際に経験することができる/チームとして作業する場合にはリーダーシップをとる術を学ぶことができる、など

5)習得力

学ぶことを学ぶ/言語による、また同時に言語に頼らないコミュニケーションの仕方を 身につける/自分の学習の仕方や行動の仕方をよりよく見直すきっかけとなる/問題解 決のための考え方を学ぶ、など

6) 新たな言語能力の展開

動きを通じた表現力や解釈力を身につけ、さまざまな角度から物事を見つめ、動きを "読める" ようになる

参考資料)

Dance contacts list edited by: Art Council / April 2004

Dance Teaching Essentials published by: Dance UK/ 2002

21st CENTURY DANCE published by Art Council/ 2001

Interviews of Christopher Thomson from the place/ 2004

『地域創造レター』No. 126/Sep 2005

Arts Council England アリソン・クラーク・ジェンキンス氏へのインタビュー、
2007年1月31日、マスターコース後期研修にて

〈資料〉

(2)日本の地方都市で実施されているコンテンポラリーダンス事業

■地域創造・公共ホール現代ダンス活性化事業

これまでのコンテンポラリーダンス事業は、主に東京、横浜、大阪、福岡など比較的規模の大きな都市で実施されていた。このため、(財)地域創造が、コンテンポラリーダンスに触れる機会の少ない地方の公共ホールと共同で、各地でワークショップと公演を実施する「公共ホール現代ダンス活性化事業」(以下「ダン活」)を平成17年度から開始した。

この事業は、地域にコンテンポラリーダンスアーティストが1週間滞在し、ワークショップ(4日間)と公演(1回)を実施するというもので、ワークショップは、学校などに出向いておこなうアウトリーチのほか、公募で参加者を集めて、ホールやスポーツクラブなどダンスの出来るスペースで実施されるものがある。対象者も、一般、子ども、親子を公募するもののほか、地元のダンスサークルと共に実施するものなど、多岐にわたる。

ダン活の公演には、初めてダンスを観る人や、ダンスに触れたことがあっても芸術性の高いダンスを観たことのない人など、様々な客層が訪れており、新しく創造的なジャンルのコンテンポラリーダンスに触れる良い機会となっている。特にワークショップにコミュニティダンスの要素を含むダン活は、コンテンポラリーダンスを通して一般の人々が芸術性の高いコミュニティダンスの良さを知る貴重な場となっている。

日本におけるコンテンポラリーダンス事業の一例として、多治見市での「ダン活」の実施事例と、平成17年に「ダン活」を実施した際の関係者(参加者・ホール職員)の意見・感想(※地域創造からの提供資料より抜粋)を紹介する。3

³平成17年度はの実施団体は、以下の7箇所である。<斜里町(北海道)、金沢市(石川県)、名取市(宮城県)、大河原町(宮城県)、多治見市(岐阜県)、茅ヶ崎市(神奈川県)、豊岡市(兵庫県)>

①実施事例-岐阜県多治見市で行われたコンテンポラリーダンス事業-

■小学校でのワークショップ

実施日時: 平成 18 年 2 月 1 日 (\pm) $14:00 \sim 15:00 2 月 2 日 <math>($ \pm) $9:30 \sim 11:20 \sim 15:00 \sim 10$

実施場所: 根本小学校4年生(参加者/約35名)

北村 成美(しげやん) アーティスト:



●しげやんのあいさつ

「私は先生ではないので、「しげやん」と呼んでください。踊りをつく る振付家というお仕事をしています。」としげやんの自己紹介。2日 間にわたって、みんなで踊りをつくることを説明。

●デモンストレーション「コーヒーダンス」

「自己紹介を兼ねて踊ります。しげやんってこんな変な踊りをつく る人なんやなぁっていうことを知ってもらいたいです」といって、「コ ーヒーダンス」を披露。子どもたちは顔を見合わせながら楽しそう に笑ってみていた。





「みんなが面白いと思ったことはなんでもダンスにしてもいい。今 日はたくさん面白い踊りをつくりたいと思います。そのために、まず 最初に体をいろいろ動かしてみたいと思います。まずは私のまね をしてください」だら一つとしたり、股を開いたり、体育館中を走り回 ったり、ゴロゴロ転がったり手足をぶらぶらさせたり等、しげやんが 即興で生みだす個性溢れる動きに、子どもたちの笑い声が止まら ない。

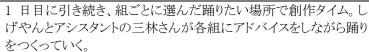
まねおどりの最後のほうになると、しげやんが、いくつかの動きを 繰り返し、基本の踊りをつくっていく。これを「根本小ダンス」と名づ けた。





この根本小学校ダンスを基本に、3つの組に分かれて踊りをつくっ ていく。その前に、各組ごとに体育館のどこで踊りたいかを決める 時間。子どもたちは体育館を自由に走り回り、活発に話し合いな がら、自分たちの踊る場を決めていく。舞台の上のカーテンから出 てきて踊る組、体育館の両脇から走ってきて中央で合流して踊る 組など個性豊かな発想が飛び出す。「明日どんな踊りをしたいか をちょっとだけ考えてきてください」と締めくくり1日目は終了。

●創作タイム



ダンスサークルに所属する子どもが数名おり、創作をリードしてい る様子が伺える。一方で、ダンスで習った側転が続出。そこで、し げやんが、なぜ側転を踊るのかと理由をみんなに問いかけていく と、新しい発想で踊りが生まれいった。



●グループごとに発表し講評しあう 「上手いものとか、きちんとしたものをつくる必要はない。これから みんなに発表してもらいますが、みんなが楽しく踊れるものを見た いです。ああすれば良かったと思いながら踊るのではなく、今日作 ったもので楽しく踊ってください。」一組ごと発表をし、みんなで講 評しあった。



■一般公募によるワークショップ

実施日時: 平成18年2月3日(金) 19:00~21:00

実施場所: 多治見市文化会館 大ホール(参加者/一般約30名)

アーティスト: 北村 成美(しげやん)

●しげやんの最初の言葉

「すでにみなさんの体の中に「踊り」があります。私にとってダンスと 踊りとはちょっと違います。私のいう「踊り」とは、なにか理由があっ て体が突き進むことをだと思っています。なので、どんなに素晴ら しいダンスでもその中に「踊り」がなければ面白くないと思うので す」としげやんから説明。

●しげやんの動きをまねる

20 分間にわたって、しげやんの独創的に即興で繰り広げる動き (時には声を出しながら)に、恥ずかしそうにしながらも、楽しそうにまねをする参加者。

●しげやんの振付「ネバネバ」おどり

「人差し指と中指の間に糊がついてネチャネチャしている。遠いところの別のネチャネチャに引っ張られていく。ネチャネチャの糸に体が巻きつかれる。そのネバネバの根源である納豆をわしづかみにして「あ〜掴んでしまった〜」と後悔する。最後には私が納豆になってしまい納豆の藁から出て、粘り気から開放されて去っていく」という振りつけをしげやんが即興でつくる。「『ネバネバ』を頭ではなく体の部分で感じるということ」、「体の隅々に起こる感覚が主役」など、踊るときに大切となることを参加者に伝えながら、みんなで振りつけを踊った。

●音楽に合わせて踊る

今度は、音楽にあわせて、ネバネバおどりを全員でひとりひとり自由に踊る。「恥ずかしい人?」という質問に数名が手をあげる。「踊ったことのない動きで恥ずかしい」という参加者に対してしげやんは「ばかになるということは夢中になるということ。夢中になる一歩手前だと恥ずかしい。人にどう思われるかではなくて、自分の中にものさしをつくる。<いつもの自分>から<いつもとちょっと違う自分>になること、それが、ばかになるということ、踊るということ。」と伝える。

●2グループにわかれて踊る

「舞台の上で踊る」ということを意識して、2つのグループにわかれて、ネバネバダンスを踊る。まず最初のグループが舞台に入って踊る。ネバネバから開放されて立ち去っていくエネルギーを、次のグループがもらって舞台に入り、ネバネバを踊る。

●空間を歩く

休憩後、簡単なストレッチをして会場内を歩く。人と人の間にどん どん入って歩く。自分ひとりで歩くのではなくて、相手をみながら 歩く。全員と出会うつもりで歩く。歩いていないところをなくすように 会場いっぱい縦横無尽に歩く。歩きながら参加者の体がどんどん 広がっていく。舞台の空間が参加者全員の共有された場となって いく。恥ずかしそうにしていた参加者も歩くことで次第に自分の体 に集中していった。

●全員で最後の「ネバネバ」おどり

6つの組に分かれて、前のグループが舞台上から去るタイミングをみて次の組が入る。「舞台に出ることは勇気がいること。それも「踊り」。舞台に真摯に体をささげるということ、それも「踊り」。たっぷり踊ってください。」6つの組が順に舞台に入って踊り、去っていくという方法で踊り終了。









■公演

公 演 名:神出鬼没!

なにわのコリオグラファーしげやんのバカおどりパフォーマンスツアー

実施日時/場所:2月5日(日)

お迎えダンスat大ホール廊下13:30~公演at大ホール舞台上舞台14:00~15:30お見送りダンスat中庭15:45~

来場者: 130名

アーティスト:北村 成美(しげやん)



野外中庭で踊るしげやん

●公演概要

親しみのない<コンテンポラリーダンス>をいかに身近に感じていただき、楽しんでいただくか、という点が公演を実施するにあたってのポイントとなった。そこで、会館内のロビーやホワイエなど場所を変えてパフォーマンスをするしげやんを、来場者が移動しながら鑑賞してもらうというツアー形式で実施し、イベント性をもたせた。舞台のスペースも大ホールの舞台上に客席を設置し、小さなダンススペースに作り上げた。

客層は、主にワークショップに参加したダンスサークルの 子どもたちであったので、しげやんの公演をとても楽しみに 来場し、公演中も食い入るように観ていた。



②実施地域における関係者の感想・意見

※「コンテンポラリーダンスを通して地域でどのような成果があったか」ということに焦点をあて、 「コンテンポラリーダンスの可能性や魅力」に対しての感想・意見を中心に抜粋した。

■学校(小学校・中学校・高校・大学)における生徒向けワークショップより

〈先生の感想・意見〉

普段、言葉ではコミュニケーションを取ることができない子どもが、アーティストから様々な 身体表現を引き出され、自然に友達と関わるようになるなど、子どもたちの変化の大きさや コンテンポラリーダンスの持つ力に驚いた(金沢/小学校)

ゆったりとした時間の中で落ち着いて自分・他人の身体を意識できたことが生徒の内面 に新しい発見を生んだと実感している(斜里/高校)

ワークショップを通して子どもたちが生き生きとした表情に変わっていくなど、子どもたちにとって本当によい出会いであった。また、自由に表現させることのすばらしさを教えてくれるコンテンポラリーダンスに触れる事ことはとてもよい刺激になった。(豊岡/小学校)

身体の問題、自己表現の問題、コミュニケーションの問題は、現在教育界で最も取り組みが難しいとされているテーマの一つ。ワークショップはゲーム感覚で取り組みながら、その問題にダイレクトにアプローチするとても有効な手段だと思った。(名取/短大)

〈子どもたちの感想・意見〉

2人組みになってお互いをひっぱりあってバランスをとったりするのは、自分のことだけでなく相手の気持ちを考えることの大切さを教えてくれた。(金沢)

何もかもがしたことのないダンスばかりでおもしろかった。特に自分たちで作るところが楽 しかった。アーティストの体の柔らかさやいろんな動きができることにびっくりした。(豊岡)

ダンスは失敗、成功なんかないことを初めて知った。自分たちで踊りを考えたりして、いつもとは違う友達とのかかわりあいを学べた。(多治見)

■一般向けワークショップより

〈参加者の意見・感想〉

決められた型などがなく、自分の好きなように表現することができるのは新鮮であり、それ がコンテンポラリーダンスの魅力。(金沢)

心と体が開放され、新しい世界が開けた。表現することの楽しさ、日常生活の見直しなど、 刺激になった。何も考えず、間違えるということもなく、ただ思うままに自分を解き放つ。こん なことは普段ではないことなので、少し自分に自信がついた。(多治見)

通常、私たちが考えるダンスと違い、決まった型などない動きだったので、とても気持ちよく、リラックスした気持ちで楽しむことができた。子どものいつもと違った一面もみる事ができ、親子のスキンシップの面でもよかった。(豊岡)

■公演より

〈来場者の感想〉

初めてみる種類のダンスだったのでとても新鮮だった。/さまざまな感情が舞台からあふれでてくるようですばらしかった。(斜里)

今まで見たことのないようなダンス公演で楽しかった。/観ているだけで体を動かしているような気になって気持ち良かった。(大河原)

内容を理解するのは難しかったが面白かった。ダンサーの躍動感、力強さにひきつけられた。/発想が新鮮で目の覚める思いだった。50年間生きてきても知らないこと、見ていないことが多いことに悔しくなった。(茅ヶ崎)

ダンスのイメージが変わるほど不思議な世界だった。/体中で表現していてすごい迫力が あった。/変わったダンスをみることができて面白かった。(多治見)

■全体を通して

〈ホール職員の感想・意見〉

今回ダンスはとにかく楽しいものだと思った。観る人が身体を動かしたくなり、身体を動か した人がステージに立ちたくなり、ステージに立った喜びが地域に広がっていき、また新し い人たちを巻き込んでいく。ダンスはそんな可能性をもっていると感じた。(大河原)

相手と触れ合いながらコミュニケーションを取り合うコンタクト・インプロビゼーションのワークショップは、初心者にも取り組みやすく、老壮年、大学生向けともに大変好評であった。 (名取)

恥ずかしがりやで自己表現があまり得意ではない子どもたちが身体を思い切り使った表現を体験し、「照れたりしないで自然にやっているのでビックリした」「あんな表情をした子どもたちは初めて」と少し目をうるませながら語る先生をみてこちらも心が熱くなった。(茅ヶ崎)

様々なワークを通して子どもたちの心を解放し、子どもたちの表情が生き生きとかわっていく様を目の当たりにした。(金沢)

コンテンポラリーダンスのワークショップは、子ども個人の能力や体力に関係なく、どのような動きでも認められるということが子どもたちを自由にし、のびのびとした動きになった。 (豊岡)

コンテンポラリーダンスのワークショップは、参加者個人の内面から出てくるものが動作や 表現となって現れることから、普段は社会生活の中で自然にまとっている殻や鎧が一枚ず つ剥がれていく様がみえた。(豊岡)

第二章 Dance Life Project 企画立案のアイデアを探る〈研修報告〉

事業立案に先立ち、このマスターコースでは、地域企業との連携で先進的なダンス事業を 行っている福岡市、地域住人同士の教えたい意欲、学びたい意欲を結びつけた地域密着型 事業を行っている多治見市での視察を行い、多くのヒントを得た。

2-1 前期研修 in 福岡(平成18年10月7~8日)

コンテンポラリーダンス公演視察および多分野でダンスに関わる人たちへのインタビュー。 ダンスプログラムを、他のジャンルと連携して開催することで、地域がダンスで活性化し根付く 可能性が生まれる。

今回の福岡では、実際に企業と行政と民間が連携して行っているダンス公演を視察し、ダンス公演に関わる人たちをはじめ、他のジャンルで活躍し、ダンスを必要と感じている方々へインタビューを行った。

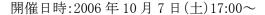
■視察公演

1.「波に乗れ!ダンス波 ~Asia Contemporary Dance Now!~」

ニョイマン・スラによる

ダンスワークショップ・デモンストレーション

(財)福岡市文化芸術振興財団では、平成17年度より年間を通じてコンテンポラリーダンスを「みる」「つくる」「体験する」場を設けることを目的とした事業を、「波に乗れ!ダンス波」と題して行っている。そのシリーズの一環として、アジアの新しい振付家兼ダンサーを紹介する公演を実施し、出演したダンサーのひとり、インドネシア・バリ出身、ニョイマン・スラを講師に、約1週間のワークショップが開催された。その成果発表を「踊りに行くぜ!!福岡公演」と連携し、プレイベントとして開催した。



会場:イムズスクエア

主催:(財)福岡市文化芸術振興財団・福岡市

企画協力: NPO 法人 Japan Contemporary Dance Network協力: 「踊りに行くぜ!!福岡公演」実行委員会/(株)イムズ





2.「踊りに行くぜ!!福岡公演」

NPO 法人 JCDN 主催の全国巡回型ダンスプロジェクトの一環で、福岡での開催は6回目となる。2回目までは天神中心部にある商業施設を運営する(株)イムズが主催で行ってきたが、3、4年目は(財)福岡市文化芸術振興財団が主催となった。

5回目からは、地元のコンテンポラリーダンス愛好者たちの手によって「福岡公演実行委員会」が立ち上がり、地域の企業と行政と市民が連携をとりながら、継続しているダンス公演である。今回の実行委員会は、ダンス愛好者のみならず、カフェ運営者、福祉施設職員、美術関係者、僧侶、学生、さまざまなジャンルの人たちで構成され、客層も幅広く好評を得る結果となっている。

開催日時:2006年10月7日(土)開演:19:00~

会場:イムズホール

福岡公演主催:「踊りに行くぜ!!」福岡公演実行委員会

後援:(財)福岡市文化芸術振興財団・福岡市

協力:(株)イムズ

全体制作·主催:NPO 法人 Japan Contemporary Dance Network

■コンテンポラリーダンス事業に関わる地域の企業や活動者たちへのインタビュー

視察したダンス公演の実施に関わった企業の担当者や、運営に携わった地元のダンス愛好者をはじめ、コンテンポラリーダンスとは違うジャンルではあるが、それぞれが関わるジャンルに於いて、コンテンポラリーダンスの可能性を見出している福祉施設や、美術館関係者にインタビューを行った。

1. 「踊りに行くぜ!!福岡公演」開催以来、連携している企業 山本裕子さん[(株)イムズ マーケットプロモーション部]

イムズは、福岡市で最も人が集まるエリア天神地区の中心に位置する複合商業施設として 平成元年にオープン。開館当初から「情報発信基地」として、常に新しいライフスタイルを提案 しており、20代~30代の若い世代に人気が高いビルである。

ホールやギャラリーなどイベントスペースや情報施設が多いのも特徴で、舞台芸術や美術については、先駆的な内容のものを紹介し続けている。特にホールでは、近年「イムズ・パフォーミングアーツ・シリーズ」と題して、年間を通してイムズ推薦の舞台芸術をシリーズ化して紹介しており、その中で「踊りに行くぜ!!」や、(財)福岡市文化芸術振興財団主催のダンス公演も行われている。

・ イムズホールの会場収入源として、貸しホールも行っているが、収入見込みより、福岡 ではなかなかみる機会がない時代の半歩先を行く、高感度なイベントをおこなうイメー ジを大切にしている。

- ・ ホールで行われるイベントに関するチケット販売には関与しないので、チケット売り上げで運営が影響されない。広報宣伝費が毎年縮小される中、ホールのイベントを行う度に、開催会場として媒体にイムズホール名が掲載されることで、ホールのイメージが自然とつくられて行く。イムズホールでは過去に行ったイベントやアーティストが、その後、有名になって行くことも多々あり、イベントの質への信頼感は、企画側と観客側共に高まっている。これまでの人脈で良い企画の話しも自然と入ってくるし、また、先行投資的に来場する観客も多い。
- ・ 商業施設ではあるが、地元の劇団、演劇制作者、NPO などとの連携事業も重要と考え、 公共ホール的役割も担っている。

2. コンテンポラリーダンサー兼制作者 スウェイン佳子さん

「踊りに行くぜ!!」福岡公演実行委員会委員長/ダンスコミュニケーション Co.D.Ex 主宰

財団主催のダンス事業開始当初から、ダンスワークショップに参加している福岡のコンテンポラリーダンサー。

ワークショップなどを通して福岡でコンテンポラリーダンスに興味持つ人たちと出会い、現在「ダンスコミュニケーション Co.D.Ex(コデックス)」を主宰し、福岡でさまざまなダンス公演やワークショップをプロデュースしている。2005 年度からは「踊りに行くぜ!!福岡公演」実行委員長。

- ・ 2005 年にはじめて「踊りに行くぜ!!福岡公演」の実行委員を立ち上げた時のメンバーは ほとんどダンサーで、自分が踊ることについて興味があるが、集客を広げる活動に繋が らなかった。今回は、ダンス以外の分野の人を意識的に募ったことで新しい人材が集ま り、地元のカフェや飲食店などの小口協賛を集めたり、それぞれが自分の周辺に宣伝 したりしたため、観客の数が増えたとともに、さまざまな層の集客に繋がった。
- ・ 先端のコンテンポラリーダンスに興味のある人がスタッフに加わってくれれば、情報の伝達・広がりが早い。

「工房まる」は、福岡市内にある無認可の福祉作業所。通所者の芸術表現を通して、障がい者の社会との繋がりをつくるための独自の試みを多数行っている。

2000 年から開催してきた「エイブルアート(=可能性の芸術)」では、障がいがある人たちの美術作品を通して、福祉施設や美術、デザイン関係者のみならず、さまざまな社会的立場の人たちへ、新しい社会との関係性を提示し続けている。





2004 年から福岡での「エイブルアート活動」は、財団が主催となり、最近では活動のジャンルも「ダンス」の領域にも広がってきている。

2005 年からは、コンテンポラリーダンサーや造形作家、 劇団主宰者、ジャズダンス教室の主宰者などと共に「ふろ しき net」を立ち上げ、今後は、ダンスのワークショップや、 身体表現にも活動を広げて行く方向にある。

- ・ アートの活動を通じて、障がいのある人たちの表現をより豊かなものにしていくことが大切だと考えている。自分たちの生活を豊かにするということに関して、障がいがあるなしは関係ない。「工房まる」は福祉作業所だけれども、「障がい」を'主語'にして活動するのではなく、障がいがあるなしに関わらず、「アート」を通して社会全体が生きやすく豊かになる活動だと思っている。
- ・ 障がいのある人もアーティストも、マイノリティーな存在であることを余儀なくされるが、 視点をかえて、マイノリティーだからこその可能性(他に自分と同じ能力の人がいない。 体に障がいがあることこそ個性であり、障がい者は先見的にそれを獲得している。アー ティストも誰もまね出来ない才能を持っているからこそアーティストとして活動できる。) をいろいろな分野で実証していきたいと考える。
- ・ 「エイブルアート活動」を福岡市文化芸術財団と協働することで、それまで参加者のほとんどが福祉関係者だったが、幅広い参加者を得ることになった。作業所で作成されたグッズなどはバザーなどで販売されることが多いが、例えば、福岡市内のミュージアムグッズを取り扱う店舗に販売を委託したり、カフェや美容室と連携して展示を行うなど、「アート」のもつ社会性を活かして、さまざまな分野の人々との繋がりを広げることができる。
- ・ 障がいのある人は食べることしか楽しみがなくて、太っていくひとが多い。おいしくご飯 を食べてもらうために、ダンスを障がいのある人たちと一緒にすることをはじめた。

4. パフォーミングアーツと関わる機会が多いアジアの美術 中尾智路さん「福岡アジア美術館 学芸員]

近年、アジアの現代美術には、身体表現・パフォーマンスを取り入れた作品が多くみられる傾向にあると言われている。2005年に開催した3年に一度の国際美術展「第3回福岡アジア美術トリエンナーレ2005」(9月17日~11月27日)では、シンガポールのマルチメディア・アーティスト「キル・ユア・テレビジョン」の作品の中に、福岡のダンサーも参加し、福岡で、美術とダンスが出会う機会を設けた。



- ・ 福岡アジア美術館(以下アジ美)では、国内でも珍しいアジアの近・現代美術を紹介する施設。アジアにはインドネシアなど非常に身体表現に秀でたパフォーマーが多くいることもあり、美術館では美術作品とともに、身体パフォーマンスを美術作家とのコラボレーション作品として紹介している。
- ・ アジ美の展示物はマイナーなイメージが強いこともあり、遠方からの観客やごく限られた層の人以外は地元の観客も少ない。入場者数も伸び悩み、美術展運営予算も減少傾向にある。アジアの美術に限らず、コンテンポラリーダンスも、障がい者が創り出すアートも、同じようなイメージをかかえているのではないだろうか。
- ・ 子供がどんなものでも楽しんで見るのに対し、大人が「有名なもの」「素晴らしいといわれているもの」等のほかは、興味をもつことも少なく楽しんで見ようとしない傾向がよく見られる。日本人はアートを自分なりに感じたり、考えるという感覚を小さい頃から育めていないと感じる。「これを感じないとダメ」というのではなく、「自分が感じることを大切にする」という姿勢を作ることが大切。美術鑑賞に関する学校向けのワークショップなどを行うなど、観る人の感じ方の許容範囲をひろげるきっかけをつくるような、新しい企画を継続的に行う必要がある。
- ・ アジ美はアジアのアーティストのレジデンスが主で役割分担が違うという考えで、教育 普及の専門のスタッフを置いていない。学校教育への働きかけをしないといけないとい う問題意識で担当ではない人がプラスの仕事として教育普及をしているので、十分な 企画が実行できていない。
- ・ 学校は新しいことに挑戦したいのだけど、古い体制などでなかなか実現できない。学校にもぐりこんでいく戦略で苦慮しているように思う。美術もダンスと似た状況にあるように 思う。

■福岡研修で得たヒント

1. 相互メリットを創出すること

いくらダンスを地域に根づかせたいからといって、「ダンスは素晴らしいのです」と熱く訴えるだけでは連携先は見つからない。今回の公演会場となったイムズホールは、ダンス公演を実施することによるイメージの向上をメリットとして捉えている。

コンテンポラリーダンスの現状では、公演のチケット収入で莫大な経済的利益を生み出すことは厳しいが、そういったこと以外のところでメリットを感じるホールもある。ダンス側のメリットだけでなく、連携する先のメリットを創出していくことが重要。

2. 地域に密着すること

ダンスへの応援団を地道に地域で増やしていくことの大切さを実感。イムズホールでの「踊りに行くぜ!!」で印象的だったのが、地元のカフェがホワイエで焼きたてパンを発売していたり、地元飲食店のフライヤーが挟み込まれていたり、会場周辺のカフェで「踊りに行くぜ!!」特別メニューが設けられていたりしたこと。

コンテンポラリーダンスは、「限られた人が演じて、限られた人が鑑賞する」という傾向にあるが、福岡の「踊りにいくぜ!!」はまさに「地元のお祭り」のダンス公演という印象を受けた。これは、公演を主催した実行委員会による地域に密着した小回りのきく協賛活動の賜物。大口の協賛企業を探すことも大切な一方で、こうした地元での応援団がいることが、「地域のイベント」としてダンスが根付いていく重要なポイントとなる。

3. ダンスの持つ特性をいかすこと

体に障がいがあるなしに関わらず誰でも参加できること、場所や道具などの制約が少ない ため美術や福祉など他の分野とのコラボレーションがしやすいことなど、ダンスが持つ特性を 活かした事業を展開することで連携先も広げやすくなり、地域に根付いていきやすくなる。

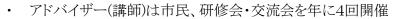
2-2 後期研修 in 多治見(平成18年12月12~13日)

後期研修では、岐阜県多治見市において、市民の市民による市民のための新しい講座のカタチを実現している「たじみオープンキャンパス」を視察した。従来、職員が講座を企画し、講師を依頼するという形でおこなわれていた生涯学習講座であるが、この「たじみオープンキャンパス」では、市民が自発的に「教えたい!」と手をあげ、講座を企画するという仕組みでおこなわれている。仕掛ける側(職員)が中心に存在するのではなく、あくまでも市民と市民のつなぎ役として存在しているという点で、「仕掛ける側が常に中心に存在している現状から、その中心点をずらし、行う目的が中心に来るようなネットワークをつくること」のヒントを得られるのではないかと、視察をおこなった。

■市民による市民のための文化活動システム「たじみオープンキャンパス」視察 岩下英治さん [多治見市文化振興事業団 総務企画課]

1. たじみオープンキャンパスの仕組みの概要

教えたい意欲のある人はたくさんいる。学びたい意欲のある人はたくさんいる。この2つの意欲を最大限に結びつけたシステムが「たじみオープンキャンパス」。ここでは、このオープンキャンパスがどのようなシステムでおこなわれているかを紹介する。



- →「教えたい」という思いがあれば、誰でも「アドバイザー(講師)」として登録でき、 教えることができる。
- ・ 講座内容(日時、会場、内容)はすべてアドバイザーが設定
 - →仕事で身に付けた知識や、技術などの専門内容はもちろんのこと、カメラの撮影方法、家事の裏技等の趣味や特技まで、なんでも OK。 ジャンルは無限大。
- 3ヶ月に1回市内に全戸配布される広報誌面にて受講生を募集
- ・ 受講希望者が10名以上あれば開講。10名に満たない場合は不成立。
- 受講料は1回(2時間)あたり500円×回数(最大12回で6000円)
 →受講料には会場費、アドバイザーへの報酬が含まれている
- ・ 講座期間は3ヶ月を1クールとし、年に4回。1 講座につき最大12回。
- ・ 講座会場は主に(財)多治見市文化振興事業団が管理運営する多治見市内の公 民館など 12 施設
- アドバイザーには受講人数に応じて報酬(最低 3000 円/1 回)

2. たじみオープンキャンパスが注目されるわけ

- ・ 市民が自らアドバイザーに登録し、講座内容を決める
 - →従来の生涯学習講座は職員が講師を探し、講座内容を決めていた

- →職員が想像もしないような個性ある講座内容が生まれている
- ・ 教えたい人と学びたい人を結びつけることによる生きた人材活用を実現
 →従来は講師の人材リストをつくるに留まり活用されないままだった
- ・ 税金を使わず年間 300 万を超える黒字。

たじみオープンキャンパス番外豆知識 オープンキャンパスのジャンルは無限大!

バレエ、太極拳、健康ヨガ、アルゼンチンタンゴ、フラダンス、パソコン講座、マネー講座、茶道、華道、ピアノ、ウクレレ クラシックギター、詩の作り方、大正琴、筝、三味線、大正琴、オカリーナ、ハーモニカ、銀粘土、ちぎり絵、プリザーブドフラワー、フランス語、ハングル、英語、ビューティスマイルデザイニング、リトミック、ソフトヌンチャク、ビーズアクセサリー、フラワーアレンジメント など

講座を成立させるには講座タイトルがポイント!夢あるタイトルで受講生の心をつかむ

講座を成立させるためには、魅力的な講座タイトルをつくることが大切。アドバイザー研修会で、魅力的なタイトルをつくるための講習もおこなっている。

- ○ポッコリお腹解消 ピラティス
- ○レディース競技麻雀
- ○根菜料理でコレステロールを下げちゃおう!
- ○知らなきゃ損!あなたの保険のムダ教えます
- ○目指せオリンピック!韓国武道テコンドー

3. オープンキャンパスの変遷 ~2001 年→2005 年~

- 講座数は、年間30講座から250講座へ増加。
- ・アドバイザー登録数:は現在200名へ。専業主婦から大学教授まで様々。
- ・受講生は年間300名から1000名へ増加。

4. オープンキャンパスをスタートしたことによる効果

- ・文化活動者の増加
- ・会場利用が増加したことによる利用料金収入の増加
- ・収益をアウトリーチ事業(学校訪問コンサートなどの普及活動)へ投入

■多治見研修で得たヒント(オープンキャンパスでの感想)

1. 誰でもが教えることができる

- ・ 教える側が技術的にはもちろん、人間的に成長することができ、人材育成、生涯教育につながる。自分が持つ技能が人を喜ばせることができることを実感できる。大きな生きがいのひとつにもなり、その町に住むことへの喜びが生まれる。
- ・ 市民の中で教える側の人が増えることで、ホールを主体的に使用する人が増え、文化施設の重要性が市民のなかでより認知されるようになる。
- ・ 高齢者はもちろん、若者にも、被雇用者としてではない、多様な働き方の場を提供している。自分の技能を生かし、副収入を得る場が多くの人に開かれていることは、地域経済の活性化にもつながる。
- ・ 「自分の持っている能力を発揮して生活できる」ことは人として生きる上でとても大切 なことであり、「人と人との信頼関係から成る」ことは、社会としてとても大切なこと で、多治見式は、それを街のしくみとして活かしていて、文化のことを語る以前に、理 想的な社会の仕組みに思えた。
- ・ 2007 年問題といわれる大量退職する団塊世代にとっても効果的なシステムなのではないか。 横浜でも「団塊の世代」対象の事業を考えることがあるが、これまで組織のリーダーとして一生 懸命に働き、文化活動になじみがない人を相手に、「退職後の楽しみにコンサートにきません か?ワークショップに参加しませんか?」と訴えても、訴求力がどれほどあるのかと疑問である。 その点、「たじみオープンキャンパス」のようなシステムであれば、「教える」立場になることもで き、リーダーとして職場で働いてきた経験をいかすことができるため、いきなりのワークショップ よりは参加しやすいというメリットがある。そういった形から地域の文化施設に足を運んでもらい、 次第に文化活動にも参加してもらえるような仕組みを作っていけたら、無理なく団塊世代を取り 込んでいけるのではないだろうか。

2. 身近な場所、安い受講料で学ぶことができる

- ・ 学ぶ側は、安い受講料であることから、さまざまな講座を体験することができ、自分の 好みや可能性について試し、挑戦してみることができる。
- ・ 横浜で「たじみオープンキャンパス」を開催する場合は、どうやるのがいいだろう?と考える場合、全市的に一括して行うよりは、18 区個別に実施をした方が効果的だと考える。区役所と連携しながら、その区の特性にあった方法での運営システムを構築し、より地域に根ざしたキャンパスを実現しやすい。また、横浜で同様のシステムを実施する場合はやはり「講師は適切な人材か。問題ある講座が運営される危険性があるのではないか」という問題がまっさきにあがると思われるがそういった問題も、地域に密着した区役所と連携することである程度は防げると考える。
- ・ 「教えたい意欲のある人」と「学びたい意欲のある人」を結びつける「たじみオープンキャンパス」は画期的なシステム。横浜には民営のカルチャースクールがたくさんあり、「学ぶ」場所はたくさん存在する。ただ、いくら「学びたい」と思っていても、どれだけ続けられるのか検討がつかないのに高額な受講料を支払う余裕がない人や、小さいお子さんがいたり、体の自由がきかなくなってきて遠出がおっくうになった高齢者の人にとってはそういった民営のカルチャースクールの敷居は高いのでは?と感じられる。その点、「たじみオープンキャンパス」のようなシステムであれば、受講料も格安、会場も地元であり、格段に通い易いのではないだろうか。しかも、地

域の公立施設がそういったシステムを運営することで、その場所が自然と地域のコミュニティの中心地になるという効果もあるのだということがわかった。

- ・ 市民との繋がりが深い公民館と連携することで、財団と市民との繋がりも広く築かれている体制が印象的だった。
- ・ 公民館やコミュニティーセンターなど、市民にとっての身近な場所を生涯学習のスペースにしていけるのは担当職員の熱意があってこそである。高い授業料や遠方などの理由で足が遠のいている客層にとっては、受講料も安価で会場も近い公立施設で実施されているオープンキャンパスは魅力的。講座数が多いため何より対象年齢幅が広いのもよい。参加されていた方々の"目の輝き""にぎやかさ"がとても印象的で、ホールと周辺スペースと協力して行ないたい事業の一つ。

3. 市民と行政(主催者)による協同の産物

- ・ 市民と行政の協働についてのシステム開発がなされている。ここでの"市民"を"アーティスト"に置き換えるなら、「コミュニティダンス」を実現するための行政との協働システムを開発してゆかなければならない。例えば、「たじみオープンキャンパス」では講師を務める市民自身が講座の運営や受講の募集に関わっているように、「コミュニティダンス」でもアーティスト自身が地域のさまざまな分野でダンスの生まれる現場に積極的に関わっていけるシステムづくりが求められていると思う。
- ・ ホール側(主催者)は、企画から後片付けまで全てを仕切る従来の業務から主にコーディネート業務に移行することで、より広い視野で地域の文化をどう発展させていくか、オープンキャンパスをどのように活性化に繋げるかなど、従来より次のステップに進んだ業務を行なうことができる。
- ・ 指定管理者制度導入で、個別の施設の特性を生かした企画を立てることを軸に考えていたが、オープンキャンパスの実施には、文化施設をいかに使い (出会いの場とし)、人を育てるかという思想を基本として、さらにソフト事業のアイデアを自分たちだけで考えるのではなく、不特定多数の市民のアイデアとやる気に頼るという、市民への信頼感が不可欠。このような発想の仕方(転換)があったこと、またそれを実現させた職員の熱意に感動した。

第三章Dance Life Project 企画書

~日本におけるコミュニティダンスの試み~

第三章は、この報告書の主眼である「Dance Life Project」の企画について述べる。

ここで提案するのは、日本の実情に会わせたコミュニティダンス事業である。この発想は、コースの命題である「ダンス事業の継続のための仕組みづくり」に対する答えであるのみならず、新しい芸術文化のあり方を提示するものとなる。文化活動を、文化の普及から新しい芸術文化の創造に至る文化事業の実施という縦軸のみで捉えるのではなく、様々なコミュニティ活動という横軸の手段として用いることで、線から面へと変化させるものである。重ねて、この企画は単なる提案ではなく、今回このコースに参加した各団体において実施が予定されている企画案である。

3-1 Dance Life Projectの理念

人間が人間であることの証のひとつが、感情を音楽や絵画などいわゆる文化活動と呼ばれる手段で表現する行為である。生命を維持するための行為とは異なるこれらの活動は、まさに人間と他の生物を決定的に区別するものであり、人間性の発露として必要不可欠な要素である。ことばで物語を作り、絵筆で絵画を描き、楽器で音楽を奏でるように、身体を表現手段として自己の表現を行うのがダンスである。すべての人が肉体を持っている限り、ダンスの可能性は無限大であると言える。鍛え抜かれた肉体だけに許されるダンスもあれば、身体に不自由を持つ人のダンスもまた存在する。

ダンスが万人に共通する身体表現であるからこそ、ダンスをコミュニケーションの手段として 用いることが可能となる。単に芸術的表現としてダンスを捉えるのではなく、ダンスを媒体にし て社会の中のコミュニケーションを確立していくことがこのプロジェクトの主眼である。

3-2 ダンスと社会を結ぶ

■コンテンポラリーダンスの可能性

コンテンポラリーダンスを直訳すれば、「現代の踊り」である。現代に生きる人々の肉体によって表現される、現代の人々が創造したダンス。その手法が、既成のバレエやダンスの概念に囚われないもの。それがコンテンポラリーダンスと言えよう。そういう意味では、コンテンポラリーダンスは、ジャンルを超えて「身体を媒体にして行う表現」としての自由さを持っている。その自由さは、絵筆や楽器といった道具を用いることなく、自分の肉体だけで表現ができることに由来する部分も大きい。時、所を選ばず、その場の条件に合わせた表現が可能である。

この、コンテンポラリーダンスが持つ自由さを利用し、「ダンスすること」を媒介にした様々な 事業を展開して行くことができるのではないか。新しい文化であり、定まった評価や大きな集 客力を持たないジャンルであるからこそ、ダンスをコミュニケーション手段とすることができ、ダンスが社会にとって不可欠な要素となって行くことにより、文化としても生き続けることができる はずである。

■公的財団、公共ホールとしてなすべきこと

公共ホールを中心とした各地域の公的財団は、その地域の文化のフラッグシップである。 創造的な文化の発信基地としての役割も大きい。地域の様々な状況に即し、コミュニティと供動して新しい文化を創造することも、公共ホールの使命と言えよう。新しい文化であるダンスをコミュニティ活動の手段として用いるという方法論は、公共ホールの将来にとっても新たな一面を示すものである。公共ホールは全国に存在する。あらゆるコミュニティと共存して行く可能性を持っている。どのようなコミュニティと、なにをやって行くのか、仕組みづくりをホールと各コミュニティが行い、プログラムの内容をアーティストが創って行く。それは新しい文化とコミュニティ活動を同時に生む場になる。

■コミュニティダンスという発想

ダンスという新しい文化を、コミュニティ手段として活用する。それがコミュニティダンスという発想である。身体と心を繋ぎ。自身の内面を自身の身体を動かすことで表現するダンスというジャンルだからこそできる方法論である。青少年の育成、福祉、健康、街づくりなど様々な活動を、ダンスと結びつけて行って行く。

コミュニティダンスの先進国イギリスでは、既に多くの活動が行われている。小学校の教育 プログラム、少年院の更生プログラム、障がい者と健常者との共通プログラムなど、多くの試み が行われている。日本の実情に合ったコミュニティダンス事業を、全国の公共ホール(団体)と 地域のコミュニティが一体となって行う。

3-3 Dance Life Project 日本におけるコミュニティダンス実施計画

■地域的な広がり

今回、このマスターコースに参加したメンバーの地域的な状況は様々である。人口、地理的条件、ホールの規模など、あらゆる状況が異なる中でも、このコミュニティダンスという発想は実施が可能である。各地で同時多発的に行うことにより、ダンスの波を全国に広げて行くことができる。初動は、このコースの参加7地域から始めて、シンポジウムの実施などにより、全国的な活動へと進化させることを目指す。

■コミュニティダンス実施のための複数年度計画

コミュニティダンス事業を成功させるためには、ダンスが社会にとって必然となることが必要である。そのためにも、当然のことながら事業の継続性が求められる。

この企画では、第1段階を3年計画とし、4年目以降を発展段階とした。

初年度は、各コミュニティとの仕組みづくりと、アーティストとの具体的なプログラムづくりを行う。一部先進的な地域ではプログラムの実施も行う。2年度は、各地域でのプログラムの実施、3年度にはプログラムに加えて、各地域での実施状況をふまえたシンポジウムを開催し、実施地域の拡大につとめる。そして、4年度以降の発展を図る。

-実施スケジュール-

年度	地域でのプログラム	各地共通プログラム
2007年度	・各コミュニティとの仕組みづくり	・イギリスでのコミュニティダンスの視察
	・ アーティストとのプログラムづくり	
2008年度	・プログラムの実施	・シンポジウムの準備
2009年度	・ プログラムの実施	・シンポジウムの実施
	新たなプログラムの構築	・地域拡大のための広報



3-4 各地域のコミュニティダンス企画案

■連携先と実施分野

コンテンポラリーダンスが社会の中のコミュニケーションツールとしての役割を果たすためには、地域のコミュニティに出て行き、積極的に連携を行ってゆくことが大切である。様々な連携先と継続したネットワークを構築できれば、ダンスに触れ理解者も増え、コミュニティダンスの流れはさらに広く繋がって行く。

コミュニティダンスを行う可能性のあるさまざまな分野のうち「コミュニティダンス」プログラムが実現および継続しやすい分野としては①実施することでPR効果が高い②コミュニケーション確立の効果が見えやすい③現代社会のニーズが高い④連携する分野の人からの評価が比較的得られやすい、との観点から「健康」・「福祉」・「教育」・「まちづくり・まちおこし」の4分野を抽出した。それぞれの概要説明の後、参加7団体による各地域での具体案を記載する。

1 健康分野 -ダンスを活用して健康で生きがいのある生活を-

ダンスという、自身の心とカラダを見つめて表現するツールを用いて、個々の身体の状態を高めることを目指す。「踊る」という行為は、太古から、人間の持つ感情・・・祈りや癒し、願いなどと結びついて、生きて行くために不可欠なものとされていた。現代人が失いつつあるその遺伝子を刺激し、心身ともに健康であるためのプログラムを考案する。

ダンスで病気を治すことなど、あり得ないと思われる人もいるだろう。しかし、実際には、脳が萎縮し半身不随になってしまった人がダンスを始めたところ、動かなかった手足がだんだん動き出し、結果、脳が正常になったという例がある。普通、脳細胞と心筋に再生能力はないとされているが、音楽に触れて体を動かす事には医学的にも説明しきれない不思議な力があるようだ。

ダンスを取り入れることによって、楽しみながら身体を動かし、自己の想像力やコミュニケーション能力までも育てることができる。それは、個々の若さや健康をキープし、免疫力を高め、生きがいのある生活を送ることに繋がる。

2 福祉分野 -ダンスを通じて共生の社会を-

コンテンポラリーダンスの可能性の一つに年齢、障がい、性別、国籍などに関わらず、皆がみたり感じたりして参加することが可能な点がある。しかし、実際にはそれらの諸条件を前にダンスをあきらめてしまっている人も多い。

社会の全ての人々の社会参加機会の拡大のために、高齢者・障がい者・病後の患者、そして身体的コンディションが変化する妊婦などを対象として、ダンスを取り入れたリハビリテーション、コミュニケーションのツールとしてのダンスを、障がいのある人とない人によるコンテンポラリーダンス公演、ワークショップなど福祉分野と連携することでダンスの可能性もひろがる。

これらの事業の参加者が、新しいダンス表現を認められることで自信をも持つようになったり、それまでとらわれていたストレスから解放されたり手段としてダンスがコミュニティに根

付くことを期待される。また、多様な存在を認め合えるコミュニティの共生アイテムとしてもダ ンスが活用されることになる。

3 教育分野 -学びの新しいかたちを目指して-

2002年より小学校で始まった「総合的学習の時間」や、地域の方々や外部の団体と協力した新しい授業づくりの増加により、特徴を活かした教育支援の期待が大きくなってきている。

しかし、年々子どもたちの周りの環境は変化していき、外で遊ばない子、体を動かすのが 嫌いな子が多く見受けられ、子どもたちの身体機能が低下していると言われている。

そういった現代の子どもたちに、からだを動かして自己表現する試みを実施し、身体能力 の向上とともに、表現力の充実を図るためのプログラムを検討した。

小学生たちには、楽しく体験できるもの、中学生、高校生は、それぞれの年代の体力と感覚に合った斬新な企画を提案し、創作する喜び、表現する楽しさをコンテンポラリーダンスから感じとってもらう。

一方、学校外での子どもを取り巻く環境が変容するなかで、「学びの場」は学校だけでなく、社会や自然の中にもあることを、ダンスによるフィールドワークを通じて体験する内容も 提案し、コンテンポラリーダンスを通して、学びの新しいかたちを発見する。

4 まちづくり&まちおこし分野 -ダンスよ、まちに出よう!!-

ダンスでまちづくりやまちおこしと言われても、えーなんで???と思われるだろう。

しかしダンスには、身体ひとつで"何処でも踊ることが出来る"という大きな特徴がある。ダンサーが踊るところが新たな"劇場"になり得るのだ。もちろんアーティストにもよるし、あまりにとんでもないところでは無理かもしれない。例えば、現代の社会問題にもなっている"シャッター商店街"。普段しまっているシャッターがガラガラッと開いたら、そこにダンサーがいて踊りが始まる。もう使われなくなっている空間が、ダンサーという異物が入ることによってその空間が違って見える。地元の人々にとって、その空間の思い出や魅力を再発見するきっかけとなるのではないか。

普通の商店街や町並みが、ダンスが存在することによって違う見え方がする。このことによって、普段の生活の中では気がつかなかった自分の住んでいる地域の魅力を発見する。このことが、まちづくりやまちおこしに繋がっていく。なぜなら魅力を感じない"まち"を"つくろう"とか"おこそう"とかは思わないからだ。

ダンスよ、まちに出よう!!をスローガンに、ダンスと一緒に自分のまちを再発見する散歩に出かけよう。

■各地域の企画案

-各シートの項目-

事業名:Dance Life Project(ダンス・ライフ・プロジェクト)

サブタイトル:日本におけるコミュニティダンスの試み

実施個所:

北海道 札幌市芸術文化財団 ①健康分野 ②福祉分野

神奈川 横浜市芸術文化振興財団 ②福祉分野 ④まちづくり&まちおこし分野

富 山 富山市民文化事業団 ①健康分野 ③教育分野

岐 阜 多治見市文化振興財団 ①健康分野 ③教育分野

岐阜 山県市教育委員会 ②福祉分野 ③教育分野

香川高松市文化芸術財団 ①健康分野 ③教育分野

福 岡 福岡市文化芸術振興財団 ①健康分野 ④まちづくり&まちおこし分野

-シートの見方-

所属・氏名 / 各所属の名称・コース参加者氏名

該 当 分 野 / 各分野からダンスに結びつく分野を選択(複数選択もあり)

実 施 名/実施事業の総称

対 象 者 / ダンスの持つ可能性を絡めながら目的を表記

関係団体/連携先の団体等

企画イメージ / 事業実施内容・方法論

-企画立案に際して-

この「Dance Life Project」は地域に合う形で継続・実現することを目的として作成されたもので、単年度ではなく3年間を実施予定とした。現段階では具体性に欠けるものもあるが、この企画書を元に各団体での情報交換を含め綿密な企画書として再考していく方針である。

平成19年度は調査と企画立案の期間とし、「Dance Life Project」の各プログラムの開始時期については平成19年に先駆けて開始する1団体を除き平成20年度からの開始予定を目指すものである。この企画書を元に各団体での情報交換を含め綿密な企画書として再考していく方針である。

所 属	(財)札幌市芸術文化財団	氏名	大野 典子		
該当分野	健康 福祉 教育 まちづくり&まちおこし その他()				
実施(事業)名	おっかなびっくり!ダンス計画				
対象者	高齢者、障がい者など身体に不自由な部分がある人たち				
関係団体	作業療法士、理学療法士、高齢者施設、福祉施設、社会福祉協議会				
企画イメージ	完全に元気でなくてもダンスはできる、という提案。それぞれの状態で楽しめるダンスを作り、生活の中に自然とダンスを取り入れる。おっかなびっくりダンスをしてみて、その楽しさに出会えたら本当の驚きが待っている。 ・ ダンサーと施設の職員が協力しながらさまざまなダンスをワークショップを通して、つくっていく ・ 参加者の了解を得て、体験の様子を映像に記録し、3年目以降の活動を広げる際に活用する。				

所 属	(財)横浜市芸術文化振興財団	氏名	高松	有希子
該当分野	健康 福祉 教育 まちづくり)&まちおこし	その他()
実施(事業)名	「○○(開催地域の名前)文化部〜ダンス	編」		
対象者	地域住民、施設利用者、利用者家族、施	設職員、施設ス	ボランティア	
関係団体	福祉施設、ボランティア団体、区役所等			
企画イメージ	・地域の福祉施設を会場に、ワークショッフ 座等を開催。ダンスのジャンルは規定せてとで、ダンスが既に生活の中に存在し、 を実感してもらう。さらにダンスに限らず、 ャンルの事業とあわせて「文化部」として見き込むことを目指す。なお当事業は、将予 低限の予算で実施。参加アーティストに スペースが狭いなど悪条件を強いることとの獲得に努め、参加アーティストに還元しての企画の創出するメリットは、①ダンスで将来のダンス鑑賞者を育成(主催者のピールや地域との交流機会の創出(施設の場の提供(アーティスト側のメリット)ではける人が圧倒的に多い横浜で、このように化活動を実施している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記している施設があることを記しているを記しているを記しているを記しているを記しているを記しているを記しているを記しているを記しているを記しているを記しているを記しているを記している。	ず、様々な切り 難しくないもの 音楽、美元との 来地域が謝団といった。 はないないがいないがいないがい。 にないないがいがい。 はいないがいがい。 はいないがいがい。 はいないがい。 はいがい。 はいないがいがい。 はいないがいがい。 はいないがいがい。 はいないがいがいがい。 はいないがいがいがい。 はいないがいがいがいがいがいがい。 はいないがいがいがいがいがいがいがいがいがいがいがいがいがいがいがいがいがいがい	口、古、大大であい、古、大大であり、古、大大であいる。「大大では、大大では、大大では、大大では、大大では、大大では、大大では、大大では	をおいくない。というなどはいい、単金・ルクををはない。単金・ルクをはない。というないでは、はないのでは、はないのでは、はないのでは、はないのでは、はないのでは、はないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、は、ないのでは、ないでは、ないのでは、

所 属	(財)多治見市文化振興事業団	氏名	加藤愛
該当分野	健康 福祉 教育 まち創り&街おこし(該当分野	を囲う)
実施(事業)名	必殺!斬新ダンスの授業 in 多治見の高校(仮)		
対象者	多治見の高校生		
関係団体	高等学校、教育委員会		
企画イメージ	 ・高校生にダンスを創作する楽しさを感じてもらう ・刺激をもとめる多感な世代である高校生に、「二新さを体験してもらい、創作する喜び、表現するみえる日常の動きからでも、独創的なダンスがパンテンポラリーダンサーから感じ取ってもらいた。 ・ダンサーに、地元の3つの公立高校をまわってーチ)を実施。 ・複数の高校で実施し、最終日に多治見市文化みあう会を高校と協力して設定。それぞれの独て高校生どうしが触発されあうことによっても、ダー・継続的に学校にダンスの事業を組み込んでもらに提示。継続することで生徒たちのなかから自然えるようダンスをする楽しさを伝えていきたい。 ・可能であれば、創作したダンスをもとに、多治見バルか秋の多治見まつりに参加。 	マンデンポースを見 割作できる。 い。 い。 と、創性ののよう、 発的に活動である。 発的に活動である。 発的に活動である。	ラリー」ならではの斬 就じてもらう。ささいに らのだということを、コ ークショップ (アウトリ て他の学校の作品を き出された作品をみ しさを感じてもらう。 3 年企画として学校 動したいと思ってもら

所 属	(財)富山市民文化事業	団	氏名	宮原	麻子
該当分野	健康 福祉 教育 る	まちづくり&ま	ちおこし	その他()
実施(事業)名	カラダで話そう! ~子どもと打	旨導者のための	Dワークシ	′ョップ~	
対象者	小学生とダンス・バレエ指導者				
関係団体	富山県洋舞協会、富山県/富山	」市教育委員会	会		
企画イメージ	・ 学生を対象に、自分の気分 身体を動かし、自分の感情 実体験させる。同時に、指導 体能力を持つダンス経験者 ちろん、コミュニティダンスの 段としてのダンスを普及させ ・ 将来的には、両ワークショッ では子どものバレエが盛ん 持つ自由さに戸惑う人間が多 と指導者に特化したワークシ	や印象を言葉 す者のためのり を対象とする。 考え方や本質 る核ともなる地 プの参加者に で、指導者も多	以外のプラファインス自 がシス自 ではの指導 でよるが、風をでなる気をできる。	が法で表現で ップも開催。 体のマスター 髪も行い、コー 算者を育てる 公演を企画 ンテンポラリ	トる楽しさを ある程度身 ークラスはも ミュニティ手 。 「する。富山 ーダンスの

所 属	(財)富山市民文化事業団	氏名	宮原 麻子	
	(財)札幌市芸術文化財団	八石	大野 典子	
該当分野	健康 福祉 教育 まちづくりと	をまちおこ	こし その他()	
実施(事業)名	ダンス de リハビリ			
対象者	怪我や病気などによりリハビリテーションが、	怪我や病気などによりリハビリテーションが必要な人		
関係団体	大学病院、リハビリテーション・センター			
企画イメージ	 病気や怪我で身体に障がいを得て、リーるダンスワークショップ。 障がいを持つ人のリハビリテーションに辛いリハビリを、楽しく、実りのあるものは・ダンサーがリハビリ施設を訪問し、各参のパフォーマンスを患者と一体で作り」 大学医学部などの協力を得て、ダンサリ運動とダンスを組み合わせたプログラ・地域のリハビリテーション・センター、まま 	ダンスを こする。 かか者の。 こげる。 ことともい ことを作成	利用し、本来は患者にとって 身体の状態に合わせた内容 こ医学的な見地からのリハビ する。	

所 属	(財)横浜市芸術文化振興財団	氏名	高松 有希子
該当分野	健康 福祉 教育 まちゃ	ざくり&まちま	おこし その他()
実施(事業)名	商店街大作戦!!		
対象者	商店街周辺の地域住民		
関係団体	商店街、区役所		
企画イメージ	・コンテンポラリーダンサーが各店舗を含 街を練り歩く。ダンサーに先導され、観 品を発見したりしてお店のスタッフと交 するのは、コミカルな身体表現にたけ ンプルに身体を見せるものなので、幅 お、将来的には地域が自主的に事業 当事業は最低限の予算で実施。財団 参加アーティストに還元していくよう努力 ・この企画の創出するメリットは、①ダン しんでもらえる場を提供しアピールする 者のメリット)②商店街の活性化(会場の提供(アーティスト側のメリット)。横海 一等に客を奪われて苦戦しているとこ いと思われる。	客も商店街流がるまれた。 にいるには、 にない世して、 はないで、よいでは、 ないで、メリットの では、 ののメリットの では、 ののメリットの では、 ののメリットの では、 ののメリットの にないで、 ののメリットの にないで、 ののメリットの にないで、 ののとは、 ののと、 ののと、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののと、 ののとは、 ののと、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののと、 ののとは、 ののと、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののとは、 ののと、	を巡る。その過程で、目玉商る。ダンサーの振付をお願いる。ダンサーの振付をお願いる。ダンスは言葉に頼らず、シを対象とすることができる。ないてとを目標としているため、成金、協賛金の獲得に努め、のない層に気軽にダンスを楽のダンス鑑賞者を育成(主催3)若手振付家への発表の場所店街は多いが、大型スーパ

所 属	(財)高松市文化芸術財団	氏名	大森 誠一	
該当分野	健康 福祉 教育 まちづく	くり&まちま	おこし その他()	
実施(事業)名	カラダとココロによ	カラダとココロによく効くダンス計画		
対象者	市民、官民勤労者	市民、官民勤労者		
関係団体	地元大学、官庁、公益法人、企業			
企画イメージ	1)地元大学のダンス部学生に協力を頼み、ラジオ体操の新しいダンスバージンを企画し、健康サークルなどヘプレゼンテーションにいく。2)地元大学のダンス部学生に協力を頼み、医学部と連携して精神医療のたのダンス療法を企画し、地元の会社や役所などヘプレゼンテーションにく。		ーションにいく。 部と連携して精神医療のため	

所 属	(財)多治見市文化振興事業団 氏名 加藤愛		
該当分野	健康 福祉 教育 まち創り&街おこし その他		
実施(事業)名	Dancing 団塊's ~運動不足な55歳以上集合!団塊全快気分爽快~		
対象者	55 歳以上(特に男性に参加してもらいたい) 20 名程		
関係団体	地元企業、商工会議所、体育協会、保健センター、民間スポーツ施設、シニア		
内外回件	が組織するNPO		
	・ 次なる人生を歩むのにまだまだエネルギーのありまっている団塊世代。退		
	職後、自分の居場所はどこだろう?なにをしたらいいのだろう?と探し求め		
	ている方が多いはず。そんな世代をターゲットに、ダンスを通して同じ世代		
	と触れ合い、心身ともにリフレッシュ!そして仲間もできれば、なおよし。		
	健康と創作を織り交ぜたワークショップ。		
	55 歳以上に年齢を設定することで、ダンスの敷居の高いイメージをなくす。		
企画イメージ	・ 多治見では 18 年度に 65 歳以上を対象にしたダンス教室を開催しており、		
	18 年度につづき、19 年度は世代をかえて実施。		
	・ 講座後は継続的にサークル活動化していくような流れをつくる。		
	・ 世代の違うダンスグループが、交流できるような合同発表会を実施する。		
	・ 長期間実施できるよう、講師に名古屋在住のダンサーを想定。		
	・ 開催場所は仕事帰りにも参加してもらえるように駅前の生涯学習施設にて		
	実施。		

所 属	岐阜県山県市教育委員会 氏名 服部裕司
該当分野	健康 福祉 教育 まちづくり&まちおこし その他()
実施(事業)名	マタニティのためのダンス"マタニビックス"(マタニティとエアロビックの造語)
対象者	妊娠(産前・産後)女性、その子ども
関係団体	市福祉部(健康課保健士)、産婦人科・マタニティ・クリニック
企画イメージ	 妊娠をしていままでの生活から変った方への新しいエクササイズを提供し、身体に負担の少ない身体表現を求める。 妊婦になって予定以上に体重が増えて困っている方や心身が情緒不安定な時期に、マタニティ・クリニックなどと提携をしてリハビリを必要とされる人や興味を持った人を対象に実施する。 ダンサーとクラシック音楽などのアーティストらが検診場所やマタニティ施設を訪問、各参加者の身体の状態に合わせてダンスによる身体表現と必要な運動要素、ストレス開放になるような内容のパフォーマンスを実施する。 保健士とマタニティ・クリニックの協力を得て、ダンサーらとともにリハビリ運動とダンスを医学的に可能な組み合わせを検討しながらプログラムを作成。

所 属	(財)福岡市文化芸術振興財団 氏名 吉村 美紀
該当分野	健康 福祉 教育 まちづくり&まちおこし その他()
実施(事業)名	朝カフェ&グッドモーニング!ダンス
対象者	福岡市中心部に通勤するサラリーマン
刈 家 有	公務員。公園などで運動する高齢者など。
	○ビジターズインダストリー(V. I)
	福岡市経済振興局が主宰し、商業施設やメディア、交通関連など民間企業や
関係団体	行政の若手事業企画担当によって構成される組織。(JR 九州・天神 FM・九州
	コカコーラ・福岡地所など)福岡の観光資源を活かしながら「おもてなしの都市
	づくり」施策を実現するための事業を共同企画し、定期的に実施している。
	・ 街の爽やかなイメージづくりをめざすV. I主催「朝カフェ」と共同し、健
	康的な爽やかなイメージを提供する。元気な人たちが働き、爽やかな人々
	が暮らすイメージづくりを目指す福岡都心の「街づくり」に役立てる。
	・ 都市部活性化をはかる事業に取り組んでいる団体と協働で開催し、さま
企画イメージ	ざまな立場で事業を企画するディレクターたちに、ダンスが街の活性化事
正画イグ・ク	業として役立つことを広く知ってもらう。
	コンテンポラリーダンス事業は、高尚で採算が取れないというものだけで
	ないことを事業企画者に提示。
	・ 日頃、ダンスを踊ったり、鑑賞することが無い人たちを広く巻き込み、
	「自分はダンスはしない」と思っている人たちの概念を打ち破る。

所 属	岐阜県山県市教育委員会	氏名	服部裕司
該当分野	健康 福祉 教育 まちづくり	(&まちおこ	こし その他()
実施(事業)名	ダンスで NEW ステップを!		
対象者	小学校・中学校・高校の児童生徒、および	が教職員関	係者
関係団体	市教育委員会、実施小中高校		
	学校教育の単元にある身体表現や創	作表現など	の枝を多く取り入れるため、
	いままでの学校生活では味わえなかった	ようなリズム	を提供。
	・小学校低学年:ダンサーや学校の先生	生からいろ	いろなリズムやフォームを体
	験し、柔軟な体と枠にとらわれない動き	を習得する	, o
	・ 〃 高学年:コンテンポラリーダンス	の楽しいリ	ズムの中から瞬発力と粘りの
	ある体を持てるようプログラムを検	討する。	
企画イメージ	・中学校 :ダンサー達とともに、持り	入力とスタミ	ナがつくようなカリキュラムを
正画イグーク	身体の状態に合わせて実施する	00	
	・高校(成長過程):幼少から培ったリズ	ム感と瞬発	力が、ダンスを通じて運動能
	力を多く引き出すことが出来るよ	うになる。ス	ポーツなどの多種目への挑
	戦も可能で、身体表現をもとに更	なる可能性	生を引き出すことが出来る
	※ 一貫校的な連携を公立学校でも提供	にできるよう	、運動とダンスを組み合わせ
	て検討しながらプログラムを作成。wo	rkshop でを	本験して物足りない参加者に
	は、もっと深く経験できるようダンスコ・	ースを設置	0

所 属	(財)多治見市文化振興事業団	氏名	加藤愛	
該当分野	健康 福祉 教育 まち創り&街は	健康 福祉 教育 まち創り&街おこし (該当分野を囲う)		
実施(事業)名	聴覚に障がいを持つ方のためのコミュニティダン	ス講座		
対象者	・聴覚にがいのある方 20名程	・聴覚にがいのある方 20 名程		
関係団体	東海地域の聴覚障害者協会、聾劇団、社会福祉協議会、手話サークル等			
	・ 聴覚に障がいをもつダンサーによる、聴覚障碍者のためのワークショッ			
障がいを持つ方でもダンスを踊ることができることを実際に		際に体験してもらうこ		
企画イメージ	とが目的。聴覚に障がいのあるダンサーを講	師に招く	ことにより、聴覚に障	
正岡イグ・ク	がいのある方の参加を促す。			
	ダンスを健常者だけのものではなく、障がいのある人にもひらかれたものに			
	していきたい。 参加者同志でダンスを創作し	、最終日	に発表会。	

所 属	(財)福岡市文化芸術振興財団 氏名 吉村美紀		
該当分野	健康 福祉 教育 まちづくり&まちおこし その他()		
実施(事業)名	「博多灯明ウォッチング〜ダンスで道案内〜」(案) ①サイトスペシフィック公演 ②ワークショップと発表会		
対象者	① 地域のコンテンポラリーダンサー② ダンス経験有無にかかわらずダンスに興味がある人		
関係団体	博多部まちづくり協議会		
企画イメージ	 地域の伝統的催事と共同で開催することで、地域でダンスの認知、理解度があがる。 ダンスアーティストが伝統的催事に関わることで、祭りの見所を増やしながら、地域にダンスを浸透させる大切な役割りを果たせ、しいては、地域にダンサーが必要な社会をつくって行く足掛かりとする。 福岡市内の下町「博多部」の神社や寺に「千灯明」という名で行われていた行事を、10年ほど前から、「博多区まちづくり協議会」が主体となって、エリアの商業施設や、地域のボランティア、現代美術家などが参加し、「博多灯明ウォッチング」と名を変えて行われている。 開催箇所も、寺社の通りに限らず、学校の校庭などを利用して、灯明で描かれた地上絵なども描かれている。その地上絵の中や各会場の中でダンスアーティストや、地域の人たちによるダンスが行われる。 地域の人向けのワークショップを開催し、発表の場とする。アートに関して保守的な自治体活動者を巻き込むことで、日頃アートに関心を寄せることが無かった人たちが自然とアートに取り込まれる。 		

所 属	(財)高松市文化芸術財団	氏名	大森 誠一
該当分野	健康 福祉 教育 まちづくり&まちおこし その他()		
実施(事業)名	ダンスがはぐくむ学び新体験		
対象者	小中学生		
関係団体	小中学校		
企画イメージ	1)地元小学校に協力を頼み、小学生とともに、音楽とダンス、図工とダンス、国語とダンス、社会とダンスなどの課外授業を試みる。2)地元小学校に協力を頼み、小学生とのプチ遠足を実施し、ダンサーがナビゲーターとなって、まちや自然をカラダで感じる社会見学を試みる。		

3-5 Dance Life Project 思い描く将来像

Dance Life Projectは、社会の中におけるダンスの新しい役割を見出して提案し、共通の目的をもつ連携先とともに、地域にあったプログラムを全国複数の地域で同時に実施することで、社会に注目されるムーブメントを起こそうとする試みである。コンテンポラリーダンスの特性を生かしたプログラムにより、"ダンスをするのは特定の人だけ"という従来のイメージが覆され、人々が"すべての人がダンスをすることができる"という事実に気づいたとき、ダンスは日本の中において社会的存在価値を得る。現在の鑑賞型、体験ワークショップ型事業以外に、ダンスは新しい進化の可能性を持ち、ダンスを愛し生活の一部に取り入れる人は飛躍的に増大する。

心のままに「踊り」「表現」すること、さらにそれを複数の人と共に行うことで、感性、想像力、コミュニケーション力が養われる。自分の身体と向き合い、知ることで自分の健康や行動について意識力が高まる。踊りを素直に楽しむことで、心が動き、心と身体の生命力を取り戻す。・・ダンスが人間に与え得る良い影響は、計り知れない。

当然ながら既に日本でも現在までに、一部のダンサーや芸術文化団体などが学校や病院などでユニークなダンスプログラムを試み、着実に実績をあげている。しかし、残念ながらそれらが単独・単発で行なわれているため、その効果、内容が一般的にまだまだ知られていない現状がある。今回のDance Life Projectでは、全国7地域で同時期に各地域にあったプログラムを展開することに大きな意味がある。今まで点であったものを線で結び、浮かび上がらせることで、その実施内容や効果を社会にアピールすることができるからである。各地域での各々の企画は地味なものかもしれない。しかし、同じ目的を持つ連携先を見つけ、全国にある公共ホールならではのネットワークを活かすことで、一つ得られた効果を一つでなく何倍にも育てることができる。Dance Life Projectに参加するホールや地域、人々が増えてゆき、発祥元がどこであるのか忘れられるほど、ダンスが日本人の日常生活の中に溶け込んでしまうような時が来るならば、ダンスはもとより芸術の新たな社会的役割が認知されるとともに、日本の現代人が抱えるさまざまな問題にも新しい解決の糸口が見えてくるのではないだろうか。

知性偏重で人々のコミュニケーションが希薄と言われる現代社会に豊かな感性が蘇り、人々の人生にいきいきとした元気が取り戻されること。公共ホールは地域の人々に芸術のあらゆる力によって感動と生きる力、希望を与える場所として存在する役割がある。Dance Life Project は、ダンスや芸術とともに、我々公共ホールや文化団体の社会的存在意義を人々に訴えかけるものでもある。